

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12613

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720362

研究課題名(和文) 18世紀ハンガリーにおけるギリシア商人の社会史的研究

研究課題名(英文) Social History of Greek Merchants in the 18th Century Hungary

研究代表者

秋山 晋吾 (AKIYAMA, Shingo)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：50466421

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀の中央ヨーロッパにバルカン半島のオスマン帝国領から到来した商人集団の活動を、ハンガリー中央部のギリシア商人、トランシルヴァニア(現ルーマニア)のブルガリア商人に注目して分析した。18世紀中頃にピークに達するハンガリーにおけるギリシア商人の活動が妻子を故郷に残した出稼ぎの形態で行われたこと、1770年代以降に進められた定住化を経ると商人集団内での言語による差異化が進んだこと、ブルガリア商人は18世紀中頃以降に急速に農民化していったことが明らかになった。また、これら陸路のバルカン商人ネットワークと地中海のギリシア商人ネットワークの比較検討も行った。

研究成果の概要(英文)：This research analyses the activities of merchants from Ottoman Balkans in the eighteenth-century Central Europe, especially the Greek merchants in Hungary and the Bulgarian merchants in Transylvania(today Romania). The analysis reveals that the Greek merchants in Hungary up to the mid-eighteenth century acted as "Gastarbeiter", leaving their family at homeland, that after 1770s' settlement the language-based differentiation occurred between the Greeks and the Vlachs, and that the Bulgarians in Transylvania lost their character as merchant in the second half of the eighteenth century. It makes clear that the comparison between these "inland" Balkan merchants and the mediterranean Greek merchant would be useful.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ハンガリー トランシルヴァニア ギリシア商人 ブルガリア商人

## 1. 研究開始当初の背景

近世以降(16世紀以降)のヨーロッパ西部と東部の関係は、ハンガリーをはじめとする東欧の歴史家らによる農業史・通商史研究の蓄積を基礎として、L.ウォラスティンによって定式化された「世界システム」論において典型的にみられるように、西欧による東欧の従属化の過程として理解されてきた。この図式は一方で、東西ヨーロッパの境界線上に位置するハンガリーが西欧により強く結びついていること、すなわちハンガリーの「ヨーロッパ性」を強調する主張の論拠にもなってきた。こうした論調は、ハンガリーにおける近代化の遅れの原因を16-17世紀のオスマン帝国による占領に求め、この時代を否定的に扱うことを特徴としてきた。それゆえ、17世紀末のハンガリーのオスマン帝国占領状態からの解放とハプスブルク帝国への編入は、オーストリア=西欧への従属の始まりであるにもかかわらず、「後進的」なバルカン=東欧からの決別を意味するものとして肯定的に理解されてきた。こうした傾向をもつ近世理解においては、オスマン占領期(16-17世紀)だけでなくハプスブルク支配形成期(18世紀)を対象とする研究においても、ハンガリーで見出せるバルカンの要素に対する関心が高まることはなかった。ハンガリーの歴史研究におけるこうした「西欧志向」は東西冷戦の終結とEU加盟行程の進行という状況のなかで、1990年代以降により顕著になった。しかしその一方で、オスマン占領下ハンガリーの「バルカン性」を実証的に明らかにする試みも進められている。こうした研究動向の背景にEUのバルカン諸国への拡大という国際関係上の変化があることは否定できないが、学術的にも、ハンガリーの位置する歴史的・地理的・文化的な境界性を実証的に検証するものとして高く評価することができる。ただ、こうした観点からの新機軸の研究は、16-17世紀(オスマン帝国占領期)、19世紀(バルカンへのハンガリー資本輸出の最盛期)、20-21世紀(ヨーロッパ統合)を対象にすすめられており、18世紀はハプスブルク支配の形成期として捉えられる傾向が強く、この時代のバルカンとの関係は等閑視されている。そのため、この時代のハンガリーのバルカンの要素は積極的に研究の対象とはされていない。

こうした研究状況を踏まえ、本研究では、近世のハンガリー(現在のハンガリー共和国のみならず、ルーマニアのトランシルヴァニア地方、スロヴァキア等を含む空間)に來訪したギリシア商人(ギリシア語を母語とする人々だけではなく、ひろくバルカン出身の商人がこの概念に包摂された)の実態を総合的に把握することをめざした。

## 2. 研究の目的

本研究は、ハンガリーにおけるギリシア商人の活動を分析することを通じて、18世紀

に進行したヨーロッパ世界とバルカン世界の関係性の変容を社会史の側面から明らかにすることを目的とする。

ヨーロッパとバルカンの関係性の歴史を再検討するという点において、近年の研究動向に着想を得たものであると同時に、今までこうした観点から論じられてこなかった18世紀に焦点をあてることを特徴とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、ハンガリーおよびルーマニアでの文書館史料調査とその分析、ギリシアでのフィールドワーク、ならびにハンガリー人研究者とのワークショップを通じて行われた。

(1) 史料調査を行った文書館は以下の通りである。ハンガリー国立文書館(ハンガリー・ブダペシュト市)、ブダペシュト市文書館(同)、ハンガリー・フランシスコ修道会文書館(同)、カトリック教会ジュラフェールヴァール大司教区文書館(ルーマニア・アルバ=ユリア)。

(2) フィールドワークを行った都市は、いずれもギリシア共和国の以下の都市である。アテネ市、テッサロニキ市、コザニ市、カストリア市。

(3) ハンガリーのペーチ大学およびハンガリー学術アカデミーの歴史家・地理学者との意見交換は、日本学術振興会二国間共同研究プロジェクトの一環として2度にわたり開催されたワークショップにおいて行った。

## 4. 研究成果

(1) 文書館調査・史料収集：ハンガリー国立文書館における史料調査は、2011年8月、2013年3月、2013年8月に3度にわたって行い、ハンガリー総督府文書の宗教部門文書および経済部門文書に収められた、18世紀および19世紀初頭のギリシア人共同体関連記録を中心に収集した。ブダペシュト市文書館においては、2011年8月および2013年3月に調査を行い、ギリシア商人訴訟記録、教会建設関係記録を収集した。ジュラフェールヴァール大司教区文書館においては、2013年3月および2014年3月に調査を行い、18-19世紀にトランシルヴァニアの町アルヴィンツに入植したブルガリア商人が形成した難民ディアスポラに関する文書を収集した。フランシスコ修道会文書館での調査は2014年3月に行い、ここでもアルヴィンツのブルガリア人ディアスポラに関する史料を収集した。これらの文書館における史料調査では史料のデジタル撮影を行い、撮影した史料は総計40,000枚に上った。

(2) フィールドワーク：ギリシアにおけるフィールドワークは、2012年3月および2013年7月に行い、近世ハンガリーに來訪したギリシア商人の出身地域の都市の博物館を中心に行った。アテネ市では、ギリシア国民史叙述・表象における中央ヨーロッパとの商人ネットワークの位置づけを中心に、テッサロ

ニキ市、コザニ市およびカストリア市においては、18世紀にハンガリーに來訪した商人の家屋とその環境・生業体系におもに着目して観察を行った。

(3) ハンガリー人研究者とのワークショップ：日本学術振興会二国間共同研究のプロジェクト(2010-2011年度「東中欧・バルカン地域における職能集団をめぐるインターカルチュラル圏の形成と変容」、2013-2014年度「東中欧・バルカン地域の人・モノの移動に関する考察」ともに研究代表者：山本明代教授・名古屋市立大学)により、2011年11月に名古屋市立大学にて、2013年9月にハンガリー学術アカデミーにてそれぞれ開催されたワークショップ[学会発表、 ]において、研究報告をおこなうとともに、バルカン・ハンガリー関係の歴史的・地理的研究に関し、ハンガリー・ペーチ大学のバブ・ノルベルト教授、ハンガリー学術アカデミーのシヨクチェヴィチ・デーネシュ教授らと意見交換を行った。また、2013年にはワークショップの一環として、ハンガリーにおけるバルカン出身住民の痕跡をたどるフィールドワークをセンテンドレ市、バヤ市、モハーチ市、ペーチ市で行った。

(4) 学会・ワークショップ報告および発表論文：文書館史料調査と分析に基づいて、本研究期間中に発表した論文等はテーマ別におもに以下のとおりである。

ハンガリー国立文書館およびブダペシュト市文書館の史料分析の成果は、論文“Greek Merchants, Their Wives, and Transiency of Migration in Eighteenth-Century Hungary”[雑誌論文 ]およびワークショップ報告「18 - 19世紀転換期のペシュトのギリシア商人」[学会発表 ]として発表した。前者においては、18世紀中頃および後半のギリシア商人調査記録および証言記録をもとに、1770年代までのハンガリーで活動したギリシア商人が、ハンガリー滞在を一時的なもののみならず、故郷(ギリシア北部)とのつながりを維持し続けていた実態を明らかにした。すなわちこの段階まで、ハンガリーのギリシア商人は妻子を故郷に残し、定期的に帰郷するという、出稼ぎ生業者としての生活様式を維持していた。この様式は1770年代のハンガリー・ハプスブルク政府によって進められた定住化政策によって変容する。その後のギリシア商人のハンガリー社会への適応の試みを分析したのが後者である。ここでは、現在のブダペシュト市東部のペシュトにおいて18世紀末から19世紀初頭にかけて展開されたギリシア商人による教会堂建設運動を扱った。定住後のギリシア商人は自らのコミュニティの核として商業の拠点であったペシュトに独自の正教会の教会堂の建設を企図し、1790年代から建設が始まった。これはハンガリーの正教会を主導するセルビア人との摩擦を生んだだけでなく、教会建設と平行して、ギリシア商人コミュニティの

なかのギリシア話者とヴラフ語(バルカン半島南部のラテン系言語)話者との間の対立も生じさせることになったことを明らかにした。

ジュラフェールヴァール大司教区文書館およびフランシスコ修道会史料の分析の成果は、『つながりと権力の世界史』[図書 ]に収録された「近世国制とディアスポラ 18世紀トランシルヴァニアのカトリック・ブルガリア人」およびワークショップ報告“Alvinci bolgárok a 18. században. Egy eltűnt diaszpóra nyomában”(「18世紀アルヴィンツのブルガリア人 ある消えたディアスポラの痕跡をたどって」)、ハンガリー語による)[学会発表 ]として発表した。18世紀のギリシア商人の台頭に先立って、オスマン帝国の版図が最大に達していた17世紀のバルカン半島では、ブルガリア西部の都市チプロフツィを拠点としたブルガリア人商人が遠隔地商業の中心を担っていた。ヴァティカンによる対抗宗教改革を受けてカトリックに改宗し、ハンガリー南部からエーゲ海・黒海地域とアドリア海を結ぶ商業の担い手であった彼らは、17世紀末に反オスマン蜂起を起こしたために故郷を追われ、18世紀初頭にトランシルヴァニアに定住した。前者の論文においては、定住以後のブルガリア人が18世紀を通じて定住の際に獲得した特権を根拠にして他の住民から自らを差異化しつつ、当初有していた商人としての性格を世紀半ば以降徐々に失っていった過程を明らかにした。また、後者の報告においては、アルヴィンツという町において存在したハンガリー貴族、ルーマニア人農奴、ドイツ人再洗礼派職人などの諸人間集団とブルガリア人との相互関係を概観し、少数のディアスポラ集団としてこの町に居住したドイツ人とブルガリア人の間で、対立をはらみながらも協力関係が生じていたことを明らかにした。

これらのバルカン出身の商人集団がハンガリー(トランシルヴァニア含む)において担った役割とその人間集団としての変容を分析するにあたり、ひろく中近世から近代にかけての経済史および国制史上の概観を平行して行った。バルカン・中央ヨーロッパ地域の経済的つながりの概観は、「ドナウ川の近世と近代」[雑誌論文 ]として整理し発表した。また、ディアスポラが在地社会に包摂される枠組みの近世的な特徴を明らかにするための国制史の検討の一環として、『ハプスブルク帝国政治文化史』[図書 ]所収の「貴族の自治の誕生 中・近世ハンガリー史のなかの県制度」を発表した。

近世のギリシア商人に関する研究は、本研究が扱ったハンガリーをはじめとする中央ヨーロッパを対象とするものに加え、近年、地中海における17 - 18世紀のギリシア商人・商船の活動に着目する動向が表れている。そうした地中海史の研究動向と本研究をつなげる試みとして、M.グリーン著『海賊と商

人の地中海 マルタ騎士団とギリシア商人の近世海洋史』(NTT 出版、2014 年)を訳出、出版した。これを端緒に、近世ギリシア商人の総合的比較研究の可能性を開いたといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

秋山晋吾「ドナウ川の近世と近代」『歴史と地理』666 号、2013 年、57 - 61 頁、査読なし。

AKIYAMA Shingo, Greek Merchants, Their Wives, and Transiency of Migration in Eighteenth-Century Hungary, *Mediterrán és Balkán Fórum*, VII(2), 2013, pp.2-8. 査読なし

( <http://old.lib.pte.hu/elektkonyvtar/efolyoiratok/PTEperiodikak/mediterran/mediterran201301.pdf> )

〔学会発表〕(計 3 件)

AKIYAMA Shingo, Alvinci bolgárok a 18. században. Egy eltűnt diaszpóra nyomában, Japán-magyar kutatási találkozó, 2013. IX. 2. MTA Történettudományi Intézet, Hungary.

秋山晋吾「東欧ロシア史学史の課題」日本西洋史学会第 62 回大会小シンポジウム IV 「ロシア東欧の史学史」, 2012 年 5 月 20 日、明治大学(東京都)。

秋山晋吾「18 - 19 世紀転換期のペシュトのギリシア商人」「東中欧・バルカン地域における職能集団をめぐるインターカルチュラル圏の形成と変容」研究会、2011 年 11 月 4 日、名古屋市立大学(愛知県)。

〔図書〕(計 2 件)

山本明代・小沢弘明・秋山晋吾ほか 7 名『つながりと権力の世界史』彩流社、2014 年、272 (25 - 45) 頁

篠原琢・中澤達哉・秋山晋吾ほか 3 名『ハプスブルク帝国政治文化史 継承される正統性』昭和堂、2012 年、241 (103-136) 頁。

〔その他〕

秋山晋吾研究室ホームページ

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~akiyama/>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋山 晋吾 (AKIYAMA, Shingo)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：5 0 4 6 6 4 2 1